

鯨とキジムナ

—沖繩の昔話—

茨木 憲 作 儀間比呂志 絵



鮫^{さめ}どんとキジムナー

— 沖縄の昔話 —

平凡社

茨^{いば}木^{らき} 儀^ぎ間^ま比^ひ呂^ろ志^し 憲^{たし}作^{さく}
絵^え

——作者紹介——

茨木 憲(いばらき ただし)。本名、佐久川恵輝
1912年沖縄県那覇市生まれ。演劇評論家。
著書「昭和の新劇」「日本新劇小史」「ドラマの季節」等。
舞台芸術学院、東京都立大学講師。

儀間比呂志(ぎま ひろし)
1923年沖縄県那覇市生まれ。行動美術協会会員。朝日新人展、安井賞候補展、ドイツ国際ビエンナーレ展などに招待作家として出品。

鮫どんとキジムナー 定価 一、〇〇〇円

一九七一年一〇月四日 初版発行

作者 茨木 憲

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町四番地の

郵便番号 一〇二

電話 東京(二六五)〇四五(大代表)

振替 東京二九六三九番

印刷 株式会社 清水印刷所

表紙印刷 株式会社 印書館

製本 株式会社 石津製本所

もくじ



るり色の壺つぼ

子牛になった花嫁はなよめ

次郎じらあと三郎さんらあと馬泥棒うまどろぼうと牛泥棒うしどろぼう

黄金くがにの鼻嗅はなかぎ

猿さるの生き肝いざも

天とどに届いた竹

天女のむすこ

鬼を食う口

沖繩人うちなあんちゆのはじまり

馬たまごの卵

5

25

41

65

77

87

99

113

123

129

木の釜かま

心の歌

鮫さめどんとキジムナー

大鯖おおさばと大鬼おおおに

おんどりの卵たまご

水納島みななしまの鳥塚とりづか

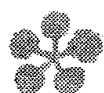
松吉まつきちと武太むうた

あとかき

題字・装丁
儀間 比呂志

249 233 219 195 183 167 153 141

る
り
色
の
壺^{つぼ}



マサリヤは、宮古島の若い漁師だった。色は黒いが、気だてはやさしい。毎朝漁に出て、魚がかかる。

「やあ、おはよう」

とかなんとか、魚にあいさつしてから、びくに取り込んだ。

ある日、海岸の珊瑚礁の岩に腰をおろして、静かな緑色の海に釣り糸をほうり込んだ。いいあんな日なので、つい、うとうとと眠気が出るほどだった。きょうは、いっこうに魚が寄ってこない。眠くなるのも無理がない。

なん時ほだったろうか。急に、ぐいぐいと引きがきた。ずいぶん手ごたえがある。これは大物だ。のがしては一大事と、引いては流し、流しては引いて、大汗かいて、やっと手もとまで引き寄せた。

これはまあ、目の下三尺（約一メートルほど）もある、エトという魚だ。

「やあ、こんにちは」

といって、釣り針はりをはずそうとすると、いきなり、ビリビリッときた。

「ふあっ」

と、大声をあげたと思ったら、マサリヤはそのままぶっ倒たおれてしまった。気絶したのだ。

ずいぶんと時がたって、ひんやりした風が、マサリヤのほおをなでたので、やっと気がついた。

見れば、潮しほが寄せてきて、足の先は水の中だ。空には三日みかづき月さんが引っかかった。なんとなく人の気配けはいがするので、後ろをふり向いたら、若いきれいな娘むすめが立っていて、マサリヤを見ていた。

「ほ、だれだおまえさんは？」

「旅の者ですが、行き暮なんじゆうれて難渋なんじゆうしています。どうかマサリヤさん、一夜の宿をおめぐみ下さい」

「え？ 旅のもんが、どうしておれの名前を知っとるだ？ それに、おれの家はあばら家で、ふとんもありやしない。人を泊とめることなんか、とてもできない」

「いえ、ただ、夜露よつゆをしのぐだけで、けっこうなのです。どうか、お願い申します」

あんまりいうので、それじゃ、ということになった。

マサリヤは、釣りざおや、びくを片づけたが、さっきの大きなエトは、海の中へもどっちまったのか、姿は見えなかった。

マサリヤの家は、自分でもいうとおりのあばら家だ。板の間にござを敷いた、一部屋きりだ。屋根のすき間から、さっきの三日月のはじっこが見えた。

夕餉は、いもの残っていたのを、ふたりで食べた。腹がくちくねれば眠くなる。ふたりは、黒砂糖が熱湯にとけるように、とろりとした気持ちになって、ぐっすりと眠った。

翌朝、マサリヤが目をさますと、昨夜の、旅の女はいない。

「えらい早立ちしたもんだな」

と、マサリヤはつぶやいたが、せめて、一夜の宿の礼ぐらいいってから、出かければよいものをと、少し腹立たしかった。ほんとは、あの美しい娘の姿を、もう一度見たかったのだ。なにやら、からだの中に、ぽかんとからっぽなところができたとやうなあんばいだ。娘と出会ったゆうべの海辺へ出てみたが、なんのしるしも残っていなかったのは、あたりまえだ。マサリヤは、その娘のことを、だれにも話さなかった。

しばらくの間は、マサリヤは、あの珊瑚礁の岩の上で釣りをするときには、自分でも知らんうち

に、なにかを待ってるような氣になっていた。エトはなん度も釣れたが、あのときのように、ビリッと、しびれるようなことはなかった。それに、もっとよい釣り場も見つけたので、そっちへ行くようになった。

そんなこんなで、あのときのこと、あの娘のことも、忘れるともなく忘れてしまった。

それから、二、三年もたったろうか。マサリヤは、凧たきの海に、サバニ（くり舟）を漕こぎ出して、いつもの所よりも、もっと遠い沖のほうまで出て行って、網あみを投げた。じよろり、じよろりと、その網をたぐりはじめると、波もないのに、急にサバニがゆれた。鮫さめでもきたか、と、まわりを見回すと、おどろいたことに、ふたりの男の子が、サバニのへりにつかまっていた。

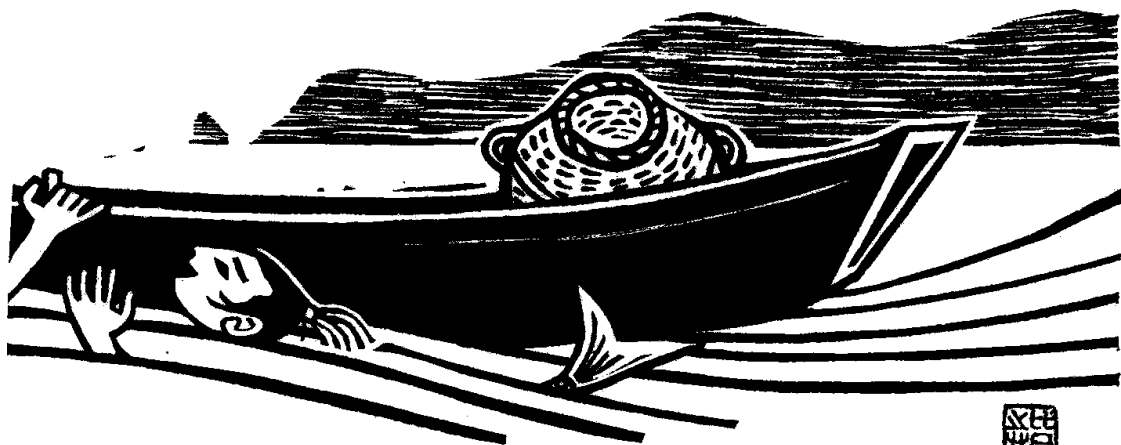
「溺おぼれたのか？ どっから泳いできたか！」

と、マサリヤが、元氣づけに大声で呼よばわると、その子が声をそろえて、

「たありいさい！（お父さん）」

と呼ぶではないか。

「たありいさい（お父さん）だあ？ おれには子どもなんかいねえ。さてはおまえたち、かっぱの



たぶらかしだな？」

と、マサリヤは權かみを取って身構みがまえた。サバニが、また、ぐわらりとゆれた。

子どもたちは、また声をそろえて呼んだ。

「わったあ（ぼくたち）は、かっぱじゃないよ。ぶたないでくれよ」

それから、代わる代わるにいった。

「三年前に、あなたの家に、旅の女の人とが泊とまったでしよ？」

「ぼくたち、そのときにできた子どもなんだよ」

「ぼくたち、双子ふたごなんだ」

「ぼくたちのあやあ（お母さん）はね、竜宮城りゅうきやうじやうの乙姫おとひめなんだ」

「あやあが、ぜひ、たありいを、お招まねきしてこいて



いうんだ」

マサリヤは、ぐたりとへたり込んだので、サバニがまたゆれた。忘れていたあの娘の顔が目の前に浮かんで、にっこりと笑った。

それで、マサリヤはふたりの子どもに、目で合い図した。子どもたちは、ふたりの肩にマサリヤを乗せると、青い海の底にもぐって行った。

赤い珊瑚の門が見えた。子どもたちは大声に呼んだ。

「あやあさい、早く門をあけて」

「たありいさいよ」

楼門が音もなく開くと、美しく着飾った、大ぜいの侍女たちが、左右に居並んでいた。

「マサリヤさん、しばらくでございました」

という声には、確かに聞き覚えがある。気品高く、正

面の椅子いすにかけている人の面おもざしは、まぎれもない、あのときの娘むすめだ。マサリヤはうっとりとして、ぽかあんとして、しばらくは、ことばも出ないありさまだ。

「あの一夜の宿は、ほんとうにありがとうございました。あの夜のことは、一生がい忘れわすれません。あのときのお情けに、ふたりまで子どもができました。どうぞ、いつまでもここにとどまって、お気楽にお過ごし下さい」

それからまあマサリヤは、乙姫おとひめさまの隣となりに腰掛こしかけて、なんというか、乙姫さまが女王さまなら、マサリヤは、その王さま、といったぐあいのことになった。

毎日毎晩まいばん、たくさんのごちそうだ。やれ、たこの踊りおどりだ、色とりどりの魚の行列、というぐあいだ。

一日たち、二日たち、五日もたった。マサリヤは、どうにも退屈たいくつでならない。陸おかでは、日がな一日、海へ出て働きずくめだった。しけで海へ出られんときには、わずかばかりの畑を耕した。一年のうちに休むのは、正月や節句せつくのほかには、台風のきたときだけだ。だから、こうして、乙姫さまのそばに一日すわっていると、からだがあぐにやぐにやと、なまってくるのが自分でもわかる。

双子ふたごの子どもたちは、マサリヤのそのようすを見てとった。

「たありいさい、陸おかに帰りたいんですね」

「お、よくわかるな。そうなんだ。ひとつおまえたちから、あやあに頼たのんでくれんかな」

「ええ、承知しょうちしました。それであやあからお許しがでたら、帰るときに、何か記念に差し上げたい、といわれるでしょう。そしたらね……」

と、子どもたちは、少し小さな声でいった。

「あやあのお部屋にある、るり色の壺つぼを下さい、といってごらんさい」

そういうと、双子ふたごの子どもたちは、さっそくに、乙姫おとひめさまの部屋に駆かけて行った。

しばらくすると、乙姫さまが出てきた。

「マサリヤさん、子どもたちから聞きました。どうしても陸へお帰りになるのですか？」

乙姫さまは、涙なみだぐんでそういう。声もうるんでいる。マサリヤはよっぽど、

「いいや、いいんだ」

というと思ったが、ここんところで腹はらをすえねばと、気張って、

「どうにも帰してもらいたい」

と答えた。

乙姫さまはうつむいて、

「それではいたし方ございません。せめてお別れの記念に、なにか差し上げたいと思います。お望みの品があれば、なんなりとおっしゃって下さい」

マサリヤは、

「別に望みはない」

というと思ったが、ふと、さっき、子どもたちのいったことを思い出した。

「……お部屋にある、るり色の壺つぼがほしい」

「え？ どうしてあの壺のことを？」

と、乙姫さまは、ちよつと顔をくもらせたが、すぐにその壺を持ってこさせた。

「ほかならぬマサリヤさまのことです。どうぞ、記念にお持ち帰り下さい。これは竜宮城りゅうぐうじょうで一番の宝物たからものです。どうかいつまでも、私だと思って下さい」

と、壺を渡した。

マサリヤは、来たときと同じように、ふたりの子どもの肩かたに乗って、海岸に着いた。

マサリヤは、ふたりの子どもに、